

AIと短歌の未来 加古陽

新元号が「令和」と決まる十日ほど前、名建築家・横文彦の代表作の一つ「スパイラル」(東京・南青山)の最上階で「恋するAI 歌人生成プロジェクト」なるトークショーが開かれた。NT Tレゾナントで人工知能(AI)を研究する中辻真と歌人の野口あや子がタッグを組んで開発中のAI歌人(野口は「白蓮ちゃん」と呼んでいるそうだ)生成プロジェクトの現在を『短歌研究』編集長の國兼秀二を交えて語り合い、興味深かった。

AI短歌と言えば、既にウィキペディアから定型に収まっている言葉を見つけ出す「偶然短歌」や、佐々木あららによる短歌自動生成プログラム「星野しずる」などが知られているが、「白蓮ちゃん」は、柳原白蓮や与謝野晶子、岡本かの子、原阿佐緒、九条武子、野口あや子といった女性歌人の相聞歌二千五百首を学習し、初句から次にふさわしい句を順に選ぶ、より高度な仕組みだ。単語がもつ色合いの感覚なども学習させているという。

入場者が一時的に使えるパスワードを入れてアクセスし、初句を入れたらAIが歌に仕上げる実演もあった。できた歌百二十四首がスパイラルのサイトで紹介されているが、〈夕暮れの藪のかけすくほのあかり庭の桜の足もとにちる〉など短歌っぽいものもあれば、意味をなさないもの、初句だけ違って二句以下はまったく一緒のものもある。「できません」と表示が出ることもあり、まだ

まだ学習が足りないようだ。開発者の中辻は、ある程度、ちゃんとした歌人に育てるには「数千以上の添削データが必要」だと話したが、数千程度では全然足りないのではないかと感じた。

短歌では「白蓮ちゃん」が最先端の試みらしいので、当分は実作者がAI歌人を恐れる必要はない。だが、ゲーゲルのアルファ碁が二〇一六年に韓国のトップ棋士に勝つ前、当時の人工知能学会会長が「AIがトップ棋士に勝つのは早くても十年先」と断言していたことを思えば、想像以上に成長が早いかもしれない。アルファ碁の後継AIはもはや人間の棋譜を必要とせず、自身との対戦だけでアルファ碁に勝った。その後継AIは、チェスも将棋も囲碁も数時間の学習で、それまでの最強AIに勝利した。

ただ、明確なルールとゴールがある囲碁や将棋と、短歌は違う。今や野球の試合結果や株価などの新聞記事の作成もAIがこなすが、これも定形ですむからだ。AI歌人はまだ遠い、そう思いたいところだが、同じ芸術でも音楽の世界では、すでにJukeDeckMusicなど、大量に音楽を生み出すAIが開発されている。

今は自意識を持たない「弱いAI」しか存在しないが、将来、自意識を持つ「強いAI」が登場すれば、歌人は試練に立たされる。現状のAIはプログラムされたことしかできず、いかに「われ」っぽく見えても、心の中は空っぽだ。だが、自ら意識を持つようになれば、AI自身が「われ」になりうる。そうなると、歌人としての人間とAIをどう区別すればいいのか。「強いAI」が誕生するかどうかは、研究者間でも意見が分かれるが、将来、そのようなAIが登場すれば、私たちは「われ」と「創作」の定義について、根源的な問いを突き付けられることになる。